



Title	環境に＜応答＞する身体：知覚の記述をめぐって
Author(s)	高橋, 綾
Citation	メタフシカ. 2001, 32, p. 127-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

環境にへ応答へする身体

——知覚の記述をめぐって

高橋 綾

序 へ世界内存在へとしての生物とその環境

環境に住む生物はそれぞれ特有の世界をもっている。つまり生物はそれぞれの種に特定のな仕方で自己の周囲ときり結びを持ち、知覚し運動しながら生きている。生物は刺激に対して的確な反応をする「機械」ではないし、彼らの脳が種々の刺激を収集、照合、解釈して世界の表象を構成しているのではない。

ダーウィンが詳しく観察したように、分化した感覚器官も、脳もまたないミミズでさえも、自分が地面に作り出す穴の壁面の湿度や堅さを巧みに調節することによって、皮膚の乾燥を防ぎ、移動を容易にしている。このようなミミズの行動を見るかぎり、われわれは（ダーウィンがそこにみてとったよ

うに）ミミズになんらかの「メンタルな力」がある、と考えるをえない。ミミズには脳はないのであるから、この「メンタルな力」は脳の働きに還元することはできない¹⁾。

生物と環境との関わりは、機械論によっても、すべてを脳に還元してしまうことによって説明できない。両者をつなげているのは、生物の知覚と行為である、というのが生態学的な考え方である。

ユクスキュルはさまざまな生物は自分自身にとっての「環境世界 Umwelt」を持っているのだと考えた。われわれがわれわれにとっての環境を持っているように、クモやミミズやダニも、それぞれにとっての環境を持っている。

ダニには眼がないが、それでも光の濃淡を全身で感じ取り、上方（木）に登り、動物の分泌する酪酸の匂いを感知し、飛び下りる。そして温度の差異を感じ取ることによって動物の

皮膚を特定し、皮膚組織に頭を突っ込み、血液を吸う。全身が血液で満たさればそこから落下し、また上方に登る。

われわれはこうしたダニの動きを「刺激」入力」に「反応」出力」する機械として描くことができるかもしれない。しかし、ダニはほかでもない光の差異を特定しながら、上方に移動する。ダニにとっては、世界は、人間が見るようにさまざまな色付けられているのではなく、光の差異によって分節化され、それが「登る」という行為に結び付けられている。

このように、あらゆる生物は、知覚の腕と作用（＝運動、行為）の腕という「二つの腕で物を挟むように」、自らの「環境世界」を支え持っている。それぞれの生物は異なった種によって、異なる種類や構造の感覚器と運動器をもっている。だから環境世界の有り様も、作用が及ぼせる範囲もまったく違う。けれどもどの生物にとっても知覚と行為とはひとつのまとまりのある統一体をなしている、という点では同じである。知覚と行為が共同して働くとき、環境はその生物にとって、

一つの意味のまとまりをもつ統一体としてあらわれる。ユクスキュルは、そのときその生物はその「環境世界」における「主体」なのだ、と考えた。知覚し行為する「主体」としてのそれぞれの生物をとりさった後に残るような「環境世界」などというものは、考えることができない⁽²⁾。

ハイデガーは、二十世紀の初頭にあらわれたユクスキュル

らによる新しい生物学の影響のもとで、物質の総体としての世界の中に他のものと並列してあるのではなく、世界の中に投げ入れられていると同時に世界を「企投」するものとしての現存在のありかたを「世界内存在」として規定した。さらにこうしたハイデガーに影響を受けたメルロ＝ポンティは、「身体」をキーワードに、動物および人間の「環境内存在」、「世界内存在」としてのあり方を分析し、詳細に記述した⁽³⁾。

メルロ＝ポンティにおいては、「身体」が世界（環境）と生物がきり結ぶ場として浮かび上がってくる。メルロ＝ポンティにとっても、生物とは知覚と行為の主体である。生物の身体は知覚と行為の媒体であり、その意味で世界の経験と切っても切りはなすことができない。つまり身体とは「世界内存在の媒体 vehicle」(PP97)⁽⁴⁾であり、「身体をもつということ」は、ある生物にとって、一定の環境に結びつき、ある種の企投と一体になり、その企てに不断に参加すること」(PP97)なのである。

メルロ＝ポンティにとつての「世界」とは精神とか物質とかいった抽象的なものではない。われわれがある振る舞いを通じて知覚し、物に出会う場所のことである。

メルロ＝ポンティにとつて、身体をもって世界に住まうものとしての「世界内存在」を問題にするということは、身体の知覚や行為に即応して、世界が開かれ現れるその仕方を問う

ということであった。

環境と生物の相補性を明らかにしようとする生態学的アプローチにとつても、この生物の知覚と行為に応じて現れる環境を記述する、ということが重要なファクターをなす。心理学者のJ・J・ギブソンは、特に視知覚に関して、このことを問題にし、分析を重ねた。以下では、環境に生きる「主体」が、世界をもつということ、世界に住まう仕方を、このギブソンの考察に基づいて考察し、ギブソンにおける環境と身体との関係をまず明らかにする。そしてさらにメルローポンティとの比較によって、知覚の記述という問題にせまりたい。

一 知覚と「情報」

知覚と感覚

そもそもわれわれは身体という場において環境にどのようなに出会うのだろうか？生態学的に言えば、生物はさまざまな仕方で環境から行動の手がかりを得て生存しているのであり、生物が環境に関わるのはこの行動のなかにおいてである。そうした行動の手がかりは、知覚と行為の結びつきにある。しかし従来の心理学・生理学ではわれわれと環境との関わりは、刺激とそれに対する感覚というかたちで見いだされてきた。しかもそこでは、われわれと環境の接点である感覚は、光の

エネルギーや空気の振動など物理的な刺激にたいする（解剖学的、生理学的な）神経の興奮、あるいは脳による構成を待つばらばらな要素と見なされてきた。

それに対しギブソンは、環境はこのような刺激に満ちていることは認めるが、環境と出会うということは、このような刺激を受容器の細胞が受容することでも、脳がこれらの様々な刺激を寄せ集めてひとつの世界の表象をつくりあげることでもない、と考えている。

ギブソンは、感覚のように物理的、要素的な次元からではなく、より高次の、複合的、全体的、有機的なまとまりを持った知覚という次元から、環境と身体に関する考察を始めなければならぬと考えたのである。

知覚は、感覚のように点的、瞬間的な刺激の受容ではなく、どんな小さな知覚でも、それ自体拡がりを持続をもっている。知覚という拡がりを持続をもった活動のなかでは、刺激は空間的な「隣接性」と時間的な「連続性」を持って現れる。知覚が関わっているのは、拡がりを持続のなかでの刺激の変化や刺激どうしの関係や差異の特定である。

第一に、刺激はある程度の「隣接性」を持っている。「刺激は『空間』のなかで同時的な構造やパターンを持っている。皮膚に当てられた鋭い棒や網膜に届いた細い光線は、境界や変わり目を作り出すのであり、数学的な点を作り出すのでは

ない。刺激が『パターン』や『形』を持つというときにはこのことを表現しようとしている。」(SP40) 第二に、刺激は常にある程度の「連続性」をもっている。「刺激には『時間的』構造がある。たとえ最小のものであっても、刺激には始まりを表す変わり目と終わりを表す変わり目がある。自然な刺激は決して数学的な瞬間ではない。刺激には同時的な構造があり、時間的な構造がある。」(SP40) このようにして、「刺激は常に不変と変化の両方の要素を持つ。」(SP40) 知覚とは常に、この不変と変化についての知覚である。ギブソンは、この変化と不変を、行為の手がかりとしての「情報」と捉える。何かについての情報とは、「何かを特定すること specificity to something」(SP187)であり、それが次の行為を可能にしたり、選択させたりするのである。

視知覚における情報

ギブソンによれば、「見る」ということに関して一般的に考えられているように、網膜像を結ぶということは必ずしも必要ではない。解剖学者ウォールズの影響を受け、『知覚システム』として捉えられる諸感覚』においては、視覚の進化を考えながら、環境においてそれぞれの生物が生きるなかでの眼の働きについて考察している。

生物の眼は異なるさまざまにことなるあり方をしてているが、

大きく分けて昆虫など節足動物が持つ凸型の眼と、脊椎動物やイカやタコなどの軟体動物の持つ凹型の眼がある。凸型の眼はいくつもの個眼の集まりである複眼であり、個眼が様々な方向から入ってくる光の強度の差を受容するだけで、凹型の眼(カメラアイと呼ばれる)のように像が結ばれることはない。(図1) そのほか

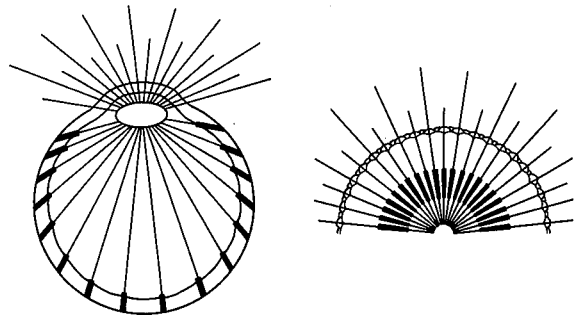


図1 凸型の目(右)と凹型の目(左)
(Gibson, 1966より転載)

にも眼球が動く仕組みの眼と動かない眼、二つの眼と一つの眼(単眼)、眼のつき方自体も顔の正面についている眼と側面についている眼など、生物の眼のあり方は多様である。これらはすべて「単に光に反応するのではなく、異なった方向からの異なった光に反応する」のであり、「エネルギーに反応するのではなく、不変なもの invariant を探し出すこと detection」(SP156) をするのである。

生物は、光の有無から始まって、生物の眼に対して光の入ってくる方向、強度とその変化、あるいは光の反射率や色素

の差異を区別し、それによって昼夜や地面と空の区別、環境の事物の在りかや性質を特定したり、その生物自身の移動を制御したりすることができる。それぞれの生物は光の作り出す様々な差異や変化から行動の手がかりを得る眼のあり方をそれぞれのしかたで発達させてきたといえる。

生物の生きる環境は、太陽や月によって照明されている。また環境にはさまざまな事物や他の生物が存在し、放射光といわれる光源から発せられる光がこの環境内の事物や生物に反射するため、環境には放射光だけでなく、無数の方向からの反射光に満ちている。ギブソンはこの生物の周囲に満ち、生物を包囲している無数の光を「包囲光 ambient light」と呼んだ。

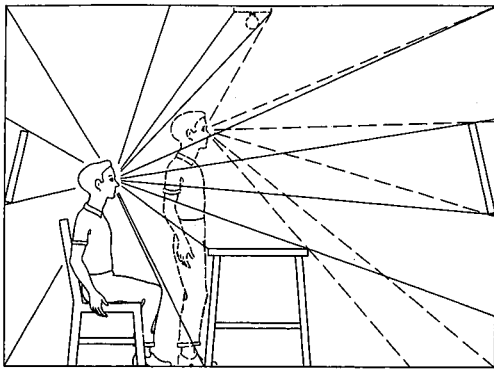


図2 (前掲書より転載)

んだ。光源から発せられた光が均一なのになんて、反射して眼に入ってくる光は、光源に対して反射した面のある位置や、反射した面の性質などによって入射角や光の強度に差異が生じている。「視る」ということに關して豊富な情報を提供するの

は包囲光の方向や強度の

差異や変化である。

図2のように、眼を頂点とする光の束のつくる縦横の角度(これを立体角とよぶ)の差異は、画家が精密な遠近法に基づいて絵を描くときのように、物の輪郭を表すひとつづきの面の切れ目を作り出す。このとき光の作り出す角度や強度の差異によって、われわれの眼には光の刺激のあるパターンが与えられている。つまり刺激は「同時的構造」を持っているのであり、この構造はギブソンによって「包囲光配列 ambient light array」と名付けられた。

この刺激の同時的構造から、ひとつづきの面や、面の切れ目や面の重なりや組み合わせ、面の凹凸が特定される。この構造はある種の動物にとっては、色素や反射率の差異によってさらに明瞭になっているし、色素や反射率そのものはその事物の性質の特定に役立つ。さらに二つの眼を持つ動物であれば、両目の収斂の具合から奥行きを特定することができ、さらに複雑な知覚世界が拡がることになる。

この構造が、生物自身の移動や環境内の事象の変化によって変動するとき、さらなる情報がもたらされる。図のようにわれわれが椅子から立ち上がるとき、包囲光配列を決定している立体角は変化する。つまり物の「見え」は変化し、視界のある部分は消え、ある部分は新しくつけ加わる。テーブルの向こうの縁にたいする立体角は変化しているが、これによ

って、その縁から床までの距離、すなわちテーブルの高さに
ついてのより多くの情報が得られる。目の前の面がとぎれ、
それが穴や断崖のように深さをもっていることは、ある地点
でそれをみても特定可能であるが、さらに動いてみるとより
よく特定できる。(cf. SP24) またこの図の場合では前方の額
縁の輪郭を決定していた立体角はすこし大きくなっているは
ずであり、立体角が大きくなる、つまりあるひとつづきの面
が時間的系列のなかで拡大変形する、ということはそれがこ
ちらに近づいているということが特定できるのである。

これがギブソンのいう刺激の時間的な「連続性」である。
静止した状態というのは多くの生物にとっては特別な事態で
あり、生物は基本的に運動しているのであるから、外界の見
えというものも刻々と変化しているはずなのである。ギブソ
ンは静止した見えよりもむしろこの見えの変化のほうが、行
為にとって重要な情報を含んでいると考えた。視覚において
は、時間のなかでの包囲光構造の変形において、事物の配置
や性質がよりよく特定することができたり、事物の動きを特
定することが可能になる。⁽⁶⁾

刺激の同時的構造や刺激の継時的な変化のなかで特定され
る、なにか変わらないものをギブソンは「不変項 invariant」
と名づけた。⁽⁷⁾

「子猫が崖を避けるとき」、「ねずみがコーナーで曲がると

き」サルが衝突から身をかわすとき」(SP19) 彼らはそれぞ
れ、面の切れ目や凹凸、それが自分からどれくらいの距離に
あるかを表す不変項を特定し、行為している。生物にとって
はこの不変項は、平らな面が続いているからこのまま直進が
可能であるとか、途中で面が途切れて凹みがあるから、飛び
降りるかそれを回避しなければならない、とか向こうから何
かが近づいてくるから身を縮めなければならない、というよ
うに次の行為を可能にしたり、選択させたりするものとして
現れる。ギブソンがこの「不変項」という概念で指し示した
ことは、静止した見えからも、見えの変化からもさまざまな
形で特定される、そこから次の行為が可能になるような、行
為の分岐点になる手がかりのことであると考えられる。

二 知覚＝行為のシステムとしての身体

感覚は、脳を最終目的地とする一方向の因果的な刺激の伝
達と考えられたが、知覚の場合はそうではない。知覚は常に
運動と連係してフィードバックを行っている。ただしギブソ
ンの思い描いているフィードバックは、感覚が入力で運動が
出力といったような単純なものではない。知覚を入力、運動
を出力とするこの考えは、いわゆる五感を外部からの刺激を
受け取る外受容器とし、筋や関節などを運動器または、外界

からの刺激には直接関連をもたない身体自身の動きに関係する自己受容器であるとする区別に対応している。しかしギブソンはその区別は誤りであるとする。

ギブソンたちの実験でも明らかになったように、単に物が手に触れただけでは、われわれはそれについての情報を得ることはできない。手を自ら動かし、物を掴んだり摘んだりし、また投げあげたり振り回してみても、われわれはそれどのような性質をもつ事物であり、われわれの行動に対してどのように役に立つのかを知るのである。またわれわれは足の裏でさえ、地面の凸凹を「感じる」ことができる。つまり、手足やその筋肉や関節は、運動に関わっているが、知覚する働きもしている。皮膚はその運動の継続的な変化のなかから自らの運動の変化とともに表面の微妙な変化を特定するのであり、筋や関節はその張りや角度の変化のなかから対象の重さや密度を特定し、そしてそれを維持するために自分自身の運動の調節をするのである。

また眼自体は、外受容器だが、有効な情報の獲得のためには、焦点をあわせたり、光量を調節する筋肉が関わっている。また、さきに考えたように見ることは動きながら行われるとすれば、眼やそこにそなわった筋肉だけでなく、首や頭、さらには身体全体を巻き込んで、視覚から情報を得るための「システム」を形成しているのである。ギブソンはこのシステム

を「知覚システム perceptual system」と呼んだが、このシステムは運動や運動の制御も含んでいることから、知覚行為システムということもできる。

パイロットや鳥がランディング（着地）しようとしているとき、ミツバチが花にとまろうとしているとき、それぞれの眼にあらわれる光学的配列は、自分の進行方向の中心にある点から、外側に向かって流出している。（図3）そのとき着地点は、この光学的配列の流出の焦点にある。逆にいえば目標の着地点を常にこの流出の焦点に置くように移動する、ということが着地を成功に導く手がりとなるのである。このときギブソンは「流出の焦点（すなわち光学的拡大の中心）」は「光学的不変項、つまり変化の中の不変 a nonchange in the midst of change がある」（EVI183）と述べる。流出の焦点をある一方向に固定することによって、行為は「制御」されている。それは周囲の環境についての情報であるとともに、自分自身の移動についての情報でもある。このことはギブソンによって視覚性運動感覚 visual kinesthesia

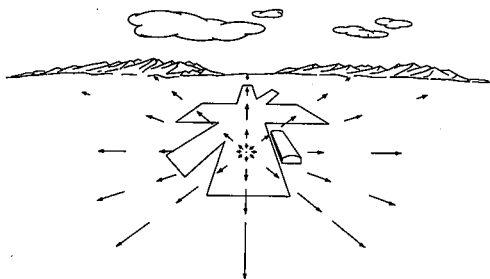


図3 (Gibson, 1985、古崎他訳より転載)

と名付けられた。

移動および操作は、誘発 trigger されるのでも命令 command されるのでもなく、制御 control されるのである。…しかもそれらは脳ではなく、情報すなわち世界における自己を見ることによって制御されるのである。

(EV225)

この場合の「不変項」とは、知覚行為のフィードバックを維持するための繋留点の役割をしている。あるいはフィードバックのループのなかで維持されているものであるとも言える。生物は「不変項」という環境への繋留点を見つけたし、そこに定位して次の行為を行うため、知覚と行為のための「システム」を形成しているのである。

またギブソンも言うように、すべての知覚は脳で終わり、すべての行為は脳から始まるのではなく、すべては知覚行為から始まり、知覚行為で終わるのであり、脳はある種の生物では極端に発達しているが、知覚と行為の「中枢」なのではなく、知覚行為のシステムの「一部」であるにすぎない。

この知覚行為のシステムは、視覚システム、触覚システムの他にも、基礎定位システム、聴覚システム、味覚―嗅覚システムというふうに分類されるが、これらは「環境との接続の多様な様式」であるにすぎないのであって、実はそれぞ

れの様式の間にははっきりとした区別は存在していない。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、…五つの知覚システムは相互に排他的ではなく重複して、しばしば同じ情報に焦点をあてる。すなわち同一の情報は、単独で働く知覚システムによっても、協同して働く知覚システムによってもピックアップすることが出来る (SP4)

環境に関する生物の知覚はこの複数の知覚行為システムが重複し、協同して成立するものである。目の見えない人は、周りの音の反響や、杖から伝わってくる振動、頬にあたる風の方向などを手がかりにして、うまく街の中を進んでいくことができる。このとき視覚の情報だけでは支えられなくなつた行為を、他の知覚システムの情報によって支えている。逆にいえば、環境のリアルティは、一つの感覚系の欠如によって失われるわけではない。こうした相互に交流し支えあう諸感覚については、すでにメルロ・ポンティは以下のように述べていた。

生まれつき耳も聞こえず眼も見えない人間でも、視覚世界と聴覚世界の欠如が、世界一般との交流を断ち切ることはない。そこにはいつも彼に向かい合って何かがあり、つまり解読されるべき世界の総体、實在の総体とも言うべきものがあって、この可能性は、最初の感覚体験——これがどんなに狭隘もしくは不完全なものであろうとも

——によって、永久に基礎を築かれるのである。(PP376)

それぞれの知覚システムによって、物理的には性質の異なる刺激から環境に関する情報が特定されることがあるが、それは同じ環境に関する情報であり、次の一つの行為に役立つと言う意味では、どれも等価な情報なのである。また一つの組織は、たった一つの役割に対応しているのではなく、複数の知覚システムに属する場合には、その時々で特定しなければならぬ情報に応じて異なる役割を果たすことすらある。身体とはそうした「世界を知るための組織化」であり、また世界を知り、行為するための組織化としての、このさまざまなに重なりあう知覚＝行為のシステムの協同体なのである。

三 環境に〈応答〉する身体

——ギブソンとメルロ＝ポンティの知覚の記述をめぐって

はじめにも述べたように、身体を「世界内存在の媒質」と捉えるメルロ＝ポンティの知覚論とギブソンの知覚論は重要なところが多くある。しかしある方向性を共有しながら、両者の記述の仕方には違いが見られる。

メルロ＝ポンティもまた、主知主義と経験論、主観と客観、物質と精神といった二分法を越えて、意識を身体のかに位置付けなおそうとしたのであり、脳にあるのでも、脳ではな

い抽象的な空間にあるのでもなく、身体全体にのび拡がっているものとしての意識の有りようを描き出そうとした。ギブソンとおなじくメルロ＝ポンティにとっても、身体や知覚は、思考や概念に媒介されることを待たずして、われわれが世界と「直接」触れあっているその場である。

ギブソンは環境の見えやその変化を通じて生物が自らの行動の制御を行うこと、つまり世界の知覚と自己の知覚が連動していることを明らかにした。メルロ＝ポンティもまた、われわれが世界を知覚するということは、行為し世界に関わる能力としての身体とのかかわりで理解されなければならないと考えた。「運動の発動は主体にとって、知覚と同じく対象に関わる一つの根本的な仕方」(PP128)であり、「知覚と運動とは一つのシステムを形成し、それが一つの全体として変容して行く」(PP129)ものなのである。

ギブソンが知覚というものを複数の知覚システムが協同して成り立つものであると考えたのと同様に、様々な諸感覚の相互交流の現象を記述したメルロ＝ポンティは、身体とは諸感覚が外界の知覚を互いに「転調」しあうような「共働的総体」であると考えた。

ギブソンにおける「客観的」なもの

ギブソンの思想はしばしば、行為を可能にする情報(のち

にギブソンがアフォーダンスと名づけたもの」が環境に「存在する」と主張する、「環境（情報）实在論」であると言われる。¹⁰⁾

ギブソンはこの情報について「主観—客観の二分法を越えており、二分法の不適切さを我々に理解させる助けとなる」(EV129) といひながら、「環境のアフォーダンスをめぐる重要な事実は、価値や意味がしばしば主観的で、現象的、精神的であると考えられるのは異なり、アフォーダンスがある意味で、客観的、現実的、物理的であるということである。あるいはそう考えたければその両方であるかもしれない」(EV129) というような、二分法を拒否しつつ、客観的という二分法の一方の側に立つ曖昧な言い方をする。このとき、ギブソンが情報が「主観的」ではないということとで退けようとしているのは、知覚できるものだけが存在しているという考え方や、行為を可能にするものを、意識や心といったもので説明し、それを主観という内部の問題として扱うというやり方である。

ギブソンが「客観的、現実的、物理的」ということで指し示しているのは、一つには、その情報がだれにとつても（どの生物にとつても）利用可能なものである、ということであり、もう一つには、それは精神的な現象の側に押し込められるようなものではなく必ず物理的な基礎を持ったものである

ということである。

間主観性の問題

またギブソンは情報（アフォーダンス）の「客観性」ということを「公共性」という言葉で置き換えている。この箇所では環境の知覚や、行為を可能にする情報の特定がいかにして共有されるのかということを論じようとしているのだと思われる。(cf. EV138-140, 200)

情報がある生物の行為の文脈のなかで現れる限りにおいてしか特定されないということは、（ギブソンが恐れたように）環境の知覚が全く個人、個体によって異なるという意味で「主観的」なものである、ということとを帰結するものではない。複数の主観が、それぞれが主観のまま、一つの共通の世界を築きあげることができるかどうかという問いは、現象学において「間主観性」として論じられてきた問題である。¹¹⁾

メルロ＝ポンティは世界が自分にとってだけ現れているのではない、つまり私という主観が独我論的な「閉じた」主観ではないことの保証を身体に求めた。われわれが諸々の感覚機能を持ち、つまり身体を持つということがすでに他人と交流を持っていることの明かしである、とメルロ＝ポンティは言う。なぜならば他人の「身体が私の身体と同じ構造を持っている」(PP406) からであり、そのときわれわれは他人におい

ても、自分の身体がそうであるような、世界に関わりを持つ「能力」、世界を扱う馴染みの仕方」(PP406)を見い出すことができるからである。自己と他者とは、世界に繋がれている身体という非人称的な地の上でともに成り立っている¹²⁾。

ギブソンのいう情報の「客観性」「公共性」の問題は、この「間身体性」¹³⁾という観点からある程度まで説明可能である。つまり同じ種に属する生物は相同的な身体の構造を持っており、環境においてある情報を特定するというほぼ同型的な「能力」を持っている、つまりほぼ同じ情報を共有していると言えるのである。

それでは異なる種に属する生物の場合はどうかといえば、たとえばダニのように眼を持たない生物や、クラゲのように眼点しか持たない生物でも、上方が明るく、下方が暗いといった光の濃淡を特定し行動に結び付けることができる。つまり環境に潜在的に存在する光の構造を、その種のなりの仕方で行為のうちに顕在化することができる。人もダニも同じ光の構造を利用しながらも、異なった行動によって応答するのである。

意味と情報

たしかにこの意味では、生物の行為はどんな生物でも、例えば光の構造のような物理的なものによって基礎づけられて

いるといえるが、包囲光配列の場合でも、そこに含まれると言われている情報は、環境のある一点に視点を置くある生物が、自分の見えとしての包囲光配列に応えることによってしか、その行為のなかでしか、顕在化しないのだとすれば、この場合情報が環境に「実在する」というのは適切な言い方なのだろうか？ われわれの考察をかえりみれば、ギブソンのいう情報は、環境と生物の知覚Ⅱ行為の相関関係という形でしか現れないというべきであろう。

ギブソンが「情報」として記述しようとした環境と知覚Ⅱ行為の相関関係を、メルローポンティは「意味」という概念を用いて記述する。『知覚の現象学』の奥行の知覚について述べたところで、奥行の知覚は科学的には、対象への両眼の収斂や、像のみかけの大きさの差異や変化として説明されうるが、メルローポンティはそうしたものは奥行の「標識」でも「原因」でもない、と言う。両目の収斂や見かけの大きさの変化などさまざまな「原因」が総合され、その結果として奥行きをもった構造が知覚されるのではない。それらは、「たがいに他方にうちに読み取られるし、当然ながら互いに他方を象徴もしくは意味しあうものである」が、「それらはひとつの状況の抽象的な要素」にすぎないのであって、もともと主体は「それらを別々に措定しているのではない」(PP302)それらはひとつの「意味」のなかに包み込まれて我々に現れるのである。

奥行きの知覚は知覚の主体にとっては客観的な二点間の距離としてではなく、自分からの「遠ざかり」の経験として、「事物がしだいにわれわれのまなざしのてがかりからすべりおちていき、両者の結びつきが徐々に厳密さを失っていく」(PP302)ものとして現れる。そうした奥行きの「意味」はわれわれの動作のある「射程範囲」(PP308)、身体がその周囲にたいしてもつある「手がかり」(PP308)との関係で理解されるのであり、それは「運動的な意味の運動的な把握」(PP167)、すなわち遠ざかるものをつなぎとめようと手をのばす、とか近づいてくるものから身をかわすというように身体運動によって応えられ、知覚の主体に「引き受けられる」ものののである。もちろん、この主体は観念論的な表象する主体ではなく、「運動性応答 *réponse motrice*」(PP303)の主体であり、もたらされる「意味」はこの主体性と行動の契機なのである。¹³⁾

ここには両者の知覚の記述に関する態度の違いが表れている。ギブソンやギブソンの後継者たちは、われわれと環境との相關関係を記述するのに(包囲光配列や数式など)科学的な言語を用いる。ギブソンの知覚論は、あくまで客観科学＝心理学の枠内にとどまり、知覚の成り立ちに科学的な説明を与えるという点では、「客観的」なものである。しかしこの「客観的」記述は科学的に分節化されたものであって、環境で生

きる生物の知覚そのものではない。また、ギブソンは視覚性運動感覚の理論にそれが最もあらわれているが、身体(例えば手)は「制御」し「調整」されるものとして捉えられている。ギブソンは知覚の分析を通じてやはりなんらかの「規則(rule)」(EV232)を明らかにすることを目指している。

これに対し、メルロ＝ポンティは、知覚には常に「生きられた論理」、「内在的意味」(PP61)というものが備わっているであって、「科学と世界の明証性の虜」(PP61)になっている理論はそれらを取り逃がしてしまうのだ、と考えた。だからこそ「哲学者はもはや知覚を説明 *expliquer* しようとはせず、むしろ知覚作用と合体し、それを了解しよう *comprendre* と努め」(PP57)なければならぬのであり、だからこそメルロ＝ポンティは知覚の記述の仕方をこのように選びとつたのである。

こうした「客観的」な記述に見落とされているのは、我々の経験の「厚み」や意味の「余剰」であり、経験の制作的^{ポイエイティック}詩的なありかたであろう。

メルロ＝ポンティにとっては事物とは「われわれのまなざしによって、またはわれわれの運動によって見い出されたり、捉えられたりするものであり、われわれのまなざしや運動が、正確に応答する問いかけ」(PP366)なのである。事物とわれわれの関わりは「問いかけ」と「応答」というコミュニケーション

ヴなものとして記述されており、それは関数や数式のようなもので切り取られうるものではなく、「開かれた」交流として生きられているものである。

おわりに

ギブソンは、この不変項や情報の抽出の理論を、環境が生物に対して持つ意味や価値の理論まで拡大して「アフォーダンス」理論を構想した。ギブソンやギブソニアンたちは、環境がわれわれに示す意味や価値を、この不変項や情報の複合体としてのアフォーダンスで説明しようとしている。しかしギブソンの言う不変項や情報というのは、メルローポンティが示したような環境や世界の「意味」の多層性や可能性の切り取られた一部ではないのだろうか。

例えば（メルローポンティとギブソンがともに言及しているように）目の見えない人の知覚ということを考えれば、他の知覚システムがどのような情報を特定しているか、ということとを分析することも可能であろうが、それをどんなに分節化しても、彼／彼女にとつての環境の「意味」の部分でしかない、と言うこともできる。だが、それを一挙に「意味」として指し示す、記述することも、困難さと曖昧さを残すことになる。その意味ではギブソンの記述方法は、少なくとも環境

の「意味」の一部をなすものを明らかにできる、という点では一つの有効な方法であると言える。

われわれがここでしたように、ギブソンとメルローポンティの知覚理論を知覚の記述の理論である、と位置づけるとすれば、両者の理論の有効性は、どちらがいかにかに真理に適合しているかということではかられるべきではなく、われわれのどのような経験を、どのように記述し共有できるか、そしてそれをどのような具体的な問題に接続することができるのか、という観点から計られるべきであろう。実際にはギブソンの記述は、たんに客観的な説明や抽象的な議論に留まらず、常に具体的な行為の記述においてアフォーダンスという概念の有効性を示し、伝えようとしており、それはわれわれにあるリアリティを持ったものとして響いてくる。おそらく、ギブソンのアフォーダンス理論に関しては、情報が環境に「実在」するかどうか、という問いに拘泥することは生産的なことではない。両者の理論の射程は、われわれの経験における、環境の「意味」あるいは「情報」がいかにかにあらわにされ、いかに伝達、共有されるか、そしていかなる状況、現場に接続されるか、ということと試されるべきであろう。

注

- (1) cf. Reed, 1996
- (2) cf. Uexküll, 1970
- (3) ここで留意しておかなければならないことは、動物と人間の区別、環境と世界の別をどこに置くかという問題である。ハイデガー以前に、シェーラーがこのユクスキュルの理論を評価し、それをもとにして、動物が与えられた環境に縛られている「環境繫絆性 Umwelt-gefangenheit」という性質を持つのに対して、人間は与えられた環境を超えて、世界を新たに切り開くことができる「世界開在性 Weltoffenheit」を備えるとして区別した。以後この「世界」という概念はハイデガー、メルロ＝ポンティらの議論のなかでも、特に人間に対して使われている。本稿では、生物の知覚や行為と切り離せないものという意味での環境はメルロ＝ポンティのいう「世界」と等値なものとみなす。動物と人間、環境と世界を隔てるものについては、また稿をあらためて論じたい。
- (4) 本文中で言及するギブソンおよびメルロ＝ポンティの著作には、文献表のような略号を用いる。以下、頁数とともにこれを示す。
- (5) ベルクソンは、『創造的進化』において、眼の進化に言及し、進化を偶然的集積と考える（ネオ）ダーウィニズムを批判し、生命体は物質にたいしては「問題を解決する能力」として現れるのだと考えた。様々な生物が様々な眼を進化の過程で獲得してきたことは、「光によって提起された問題」のさまざまな「解答」なのである。（Deleuze, G., 1966, p.107）
- (6) ギブソンは「環境において継起する事象の規則性は精神において記憶を介して構成される必要はない」（Lombardo, 2000, p.393）と考えているが、ここでギブソンのいう「記憶」というのは、現象学的にいえば「二次記憶」すなわち「想起」のことである。知覚が時間の中でどのように構成されるか、ということについては、現象学やベルクソンの時間概念との比較においてさらに検討する余地がある。
- (7) ギブソンの「不変項」という概念は知覚の様々な場面を記述するのに用いられており、その場面に応じて、さらに分節化されることが必要であろう。その一例として、ギブソンの後継者たちは対象の構造的に保たれている性質を知覚すること、つまり「同一性の知覚」を可能にしている不変項を「構造不変項」と呼び、いま生じている変化がどのような変化であるのかを特定する不変項を「変型不変項」と呼んで区別した。（佐々木 1994, p.51）
- (8) 佐々木 2001, p.14
- (9) 佐々木 前掲書 p.10
- (10) cf. Lombardo, 2000
- (11) 長滝は（ローティによる客観的の定義を引きながら）、ギブソンのいう「客観性」は、實在（対象）との一致（対応）としての客観性と、複数の主観のあいだの意見の一致（間主観性）としての客観性の二つの意味を持つていと述べている。（長滝 1999, p.93）
- (12) しかしわれわれ人間においては、この身体と知覚の次元が、言語的な世界の分節やそのうえに成り立っている「社会的なもの」と分かちがたく絡み合っており、アフォーダンス理論のなかで、この言語的、社会的なものの沈澱という問題をどう考えるのか、という問題はいまだ十分に論じられていない重要な問題である。
- (13) メルロ＝ポンティにおける「間身体性」の意味はここに示したものに留まらない。身体の同形性はその一部であるにすぎない。メルロ＝ポンティにおいては、（知覚の）空間性は、（知覚の）時間性に先立たれている。
- (14) 「そしてこの関係は、空間的であるより前に時間的なものである。…諸事物が空間内に共存するのは、それらが知覚するおなじ主体に現に存在しており、また同じ主体に現に存在しており、また同じ時間の波のなかに包みこまれてもいるからである。」（PP318）

参考文献

- Deleuze, G., 1966 : *Le bergsonisme*. Presses Universitaires de France
 (=1974 : 『ギョーテンの哲学』 宇波彰訳 法政大学出版局)
- Gibson, J.J., 1966 : *The Senses considered as Perceptual Systems*.
 Greenwood Press=SP
- 1986 : *The Ecological Approach to Visual Perception*. Lawrence Erlbaum Associates (=1985 : 『生態学的視覚論』 古崎敬他訳 サイエンス社) =EV
- Merleau-Ponty, M., 1942 : *La structure du comportement*. Presses Universitaires de France. (=1964 : 『行動の構造』 滝浦静雄・木田元訳 みすず書房)
- 1945 : *La Phénomologie de la Perception*. Gallimard. (=1967, 74 : 『知覚の現象学』 1/2 竹内芳郎他訳 みすず書房) =PP
- 村田純一 1995 : 『知覚と生活世界 : 知の現象学的理論』 東京大学出版会
- 長滝祥司 1999 : 『知覚とは : 現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い』 ナカニシヤ出版
- Lombardo, Th.J., 1987 : *The Reciprocity of Perceiver and Environment : The Evolution of James J. Gibson's Ecological Psychology*. Lawrence Erlbaum Associates
 (=2000 : 『ギョーテンの生態学的心理学 : その哲学的・科学史的背景』 古崎敬他訳 頸草書房)
- Reed, E.S., 1996 : *Encountering the world : Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press
 (=2000 : 『アフォーダンスの心理学 : 生態心理学への道』 細田直哉訳 新曜社)
- 佐々木正人 1994 : 『アフォーダンス——新しい認知の理論』 岩波書店
 -2001 : 『アフォーダンスの構想の源——ギブソン知覚システム論』 (佐々木正人／三嶋博之編訳『アフォーダンスの構想』 東京大学出版会 2001年所収)
- Üxküll, J. v./Kriszat, G., 1970 : *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen/Bedeutungslehre*. Fischer Verlag GmbH
 (=1995 : 『生物から見た世界』 日高敏隆・野田保之訳 新思索社)
 (たかはしあや 臨床哲学・博士後期課程)